特集：多様な性

当事者の想い

LGBTが差別されず、当たり前に認められる社会になってほしい

Yさん（町内在住）トランスジェンダー

MtF

町内に住んでいるMtF（体の性は男性で心の性は女性）のトランスジェンダーの方に、お話を伺いました。

学生時代・きっかけ

物心ついた3歳ごろから、自分の性別に対して違和感を感じていました。

学生時代は、女の子のグループにいたので、いじめられるようなことはなかったです。ただ男の子とは、男の子の顔色を見て機嫌がよかったら話しかけるけど、そうじゃなかったら絶対話しかけなかったですね。

自分がトランスジェンダーだと意識したきっかけは、小学生のときドラマで、女の子が男の子の格好をしたり言葉遣いをしたりしている様子を見たことで、自覚しました。

中学生のとき学ランを着るのがすごく嫌でしたね。

社会に出て受けた差別

社会に出てからは、髪を伸ばし、中性的な服装にしていました。就職の面接に行ったときに、「男の人は髪の毛を切って面接を受けないとダメだ」と言われて、そこでぶつかったことはあります。LGBTですと説明しても、面接官に変な顔をされ、「人権侵害なので差別されたと言います」と言うと、偉い人が出てきて入社してもらったらと言われましたが、差別するような所で働きたくないと断ったこともあります。

また、本人確認の際に免許証を見せて驚かれ、しつこく確認されたことが何回もあります。

時代の変化

今は全国的に性的マイノリティという存在が認知され始めましたが、私たちが子どものころには性的マイノリティなんて言葉はなく、存在が隅のほうに追いやられていた感じでした。

最近になって、ドラマなどでそれなりに取り上げてくれたり、会社でも採用してくれる所も増えてきたりして、少しずつ認知されてきたのかなと思いますが、まだまだ地方では公表できずに隠し続けて生活している人が多いと感じます。特にLGBの方は見た目じゃ分からないので。

今感じていること

今の段階では、同性のパートナーたちは、同じ家庭に入ろうとすると養子縁組にしないと家族として扱われません。一部の自治体で始めているパートナーシップ制度は、自治体が認めてくれるという姿勢が、すごくうれしいので、こうした動きが広まっていってほしいですね。

また、特に子どものころは、相談する先がなくて辛かったです。学校の先生にも相談できないし、家に帰って相談することもできずに、一人で悩みつづけないといけなかった。私もですが、特に親にカミングアウトするのが一番しんどいんじゃないかって思います。

子どものころに、安心して相談できるところがあったら相談してみたかったですね。今はそういったことで悩んでいる子がいれば、話を聞いてあげられればと思います。

榊原衣麻（さかきばらえま）さん（愛知県在住）

レズビアン

ありのままの自分を受け入れ自分らしく生きていけるように

自分がレズビアンだと気づいたのは、高校1年生のときにとても仲のよかった女の子から「恋愛対象としてみているかもしれない」といわれたことがきっかけです。それからその子と付き合い始めましたが、そのことはお互いだけの秘密で、他の人には言っちゃいけないことだと思っていたので高校生のときはずっと隠していました。

その後、関西の大学に進学して、レズビアンであることが自分らしさの中心のところにあると気づき、周りにカミングアウトしだしました。

ただ、やっぱり気持ち悪いと思われるかもと感じていたので、「人間としての魅力をもつこと」、「社会を変えていくんだという気持ちを持つ」などといった心の準備をしていました。カミングアウトのときは毎回ドキドキしましたが、周りからは「話してくれてありがとう」といった反応で、嫌悪感を抱かれるかもというのは自分自身の偏見だったのかなとも感じました。

成人した後、母親にカミングアウトしたときは、「エマはエマだよ」と言ってもらえて、涙があふれてきました。家族にカミングアウトしたことで、家族の絆が強くなって何でも話せるようになったと感じます。

このことは、みんなが当事者だと思います。ありのままの自分を受け入れて、みんなが自分らしく生きられる社会になればと思います。

LGBTの家族と友人をつなぐ会

理事　浦狩知子（うらがりともこ）氏

カミングアウトがあったら「必ず力になるから」と声をかけてください

子どもからの突然の告白

中学3年生の冬休みに、子どものすごく真剣な声で、「お母さん、うちは高校は男子として入学したい。もう生理もスカートも限界。ごめんなさい、ごめんなさい。お母さんにうちの赤ちゃんも見せられない」と泣きながら告白されました。

その告白を受け、育て方が間違ったのか、何か頭を打つなど原因となることがあったんだろうか、とうつ病になるほど悩みましたが、この子にとって本当に必要なことを見つけていくことが大事だと頭を切り替えました。また、かつての恩師に相談したところ、「その子たちの人権は絶対に守られなくてはいけない。お母さん、がんばりなさい。」と背中を押され、それからはその言葉を胸にがんばってきました。

カミングアウトは命がけ

性的マイノリティの子どもたちは本当の自分のことを言えないことが嘘をついている、みんなをだましている、そんな自分は存在しないほうがいいのかもしれないと、自分を責め、心が病んでいきます。そんな中で悩みに悩んで何日もどう伝えればいいか、ものすごく大きな恐怖と葛藤し、命をかけてカミングアウトしていると、想像していただければと思います。

カミングアウトをしっかりと受け止めて

そんな想いが込められたカミングアウトを受けたときには、外にもらさないことと驚かないこと、そして「必ず力になるから」の一言をかけていただきたいということです。

具体的にどうしたらいいかは後で一緒に考えたり、当事者団体に相談していただければよいと思いますので、解決方法は難しいとしても、まず、大丈夫、必ず力になるといってもらえたらその子が抱えている不安は半分になると思います。

大人の責任として、もう嘘をつかなくても大丈夫だよと言える環境を作ってあげればいいだけなんだと思います。